



銀鈴第拾七號（每月一回二十日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可

明治三十九年十一月二十七發行



號七拾第

銀鈴第七拾號掲載目次

禁轉載

伊豆に遊ぶ(短歌)……………平野萬里	地方俳會及俳人の評(評論)……………蘆花生
月の行衛(小品)……………ちせい	銀鈴社詩稿(短歌)
肌 寒(俳句)……………梧月選	その六 木村秋浦
小 評(批評)……………三十六峰生	その七 森脇桃村
夏の海(短歌)……………萬里選	その八 松出松葉
名勝誌を讀む(批評)……………翠激生	その九 山本潜龍
蟲 (俳句)……………羽風選	その十 河野翠激
銀鈴社詩稿(短歌)	文藝雜俎(評論)……………翠激生
その一 増野翅白	つもぐさ(俳句)……………梅窓等
その二 後藤孤星	伯水會(俳句)……………
その三 松本掬雨	陽炎會(俳句)……………
その四 小川董月	梧葉晴雨(批評)……………富田五香
その五 森脇桃村	告……………
春圖雜筆(雜文)……………千代延春圖	

銀鈴

第拾七號

明治三十九年十二月二十七日發行

伊豆に遊ぶ

平野萬里

山高く四方を閉ざし水の音か
すかにきこゆ、雲のぼる朝。
山にして老ほほけたる水車、か
たりこどりど日を暮し居る。
ほどとぎす、汝が聲に似る短命の
子を友として來しや、山へは。
風落ちし湖の上、さかしまに天城
うつりて動かぬ眞晝。

月の行衛

ちせい

「月様幾ッ……………」
古屋敷さまの門前で若い傳マの美しくしい聲!
秋草山の南の端から空を染め、松を染め、山を染め、
やがて田角をそめて、水をうつた様に静にお月様は今
古屋敷の門前を染めて眞ッ正面
「十三ッ……………」
銀杏から下りた月光は一面白晝の様、コロコロと
銀砂子に小刻みに下駄の音。
湿きをもつた瞳、凝乎と月を颯めし頭を垂れて、時な
らぬ紅葉かど……………嬢ちやんは小さき指を折つて、窺
つと……………一ッニッ三ッ——五ッ——九ッ十ウ、
「傳や十ウからッ」
「十一、」
「最つと、」
「十二、ホ、ホ、十三、……………」
よぶに連れて十一……………十二……………母指が無くなつて
食指が無くなつて、中指がね次……………十三……………腫

を離さず小さい聲

「十四、」

「それから、」

「ホ、ホ、それから姉えさまのね年、

「知つてよ、アノ一十ウ五、ね一傳や矢ッ張り今夜

も十ウ五……」

「十五夜ッて云ひます、何時でもね月様か真ッ丸るに
お成んなすつた時が十五夜ですの、ね恰度……」
と口を喋りて願貯くと、嬢ちゃんは今六ッ、月をぬ
け出した小兎の様、傳ヤが脊中に恍然と瞬きもせず、
月の行衛をながめて

(一節をぬく)

肌寒 (募集句)

梧月 選

第四回發表

肌寒やうちはふみたる室の闇

追剝に逢はで山越す肌寒き

駕側に肌寒顔や供の衆

肌寒や山駕に乗る有馬越

肌寒や家鳴追ひ込む水烟

枕して肌寒き身を横へぬ

肌寒や拮屈として客坐る

凭れ寄る恩師の机肌寒し

肌寒や馬乗りかゝる古き驛

追吟

肌寒や濡舟にのる朝渡し

○小評

前號短詩の中に松田君の「神門より」君が家「叔母の家」軽く云ひなして快く殊殊に終のものは小生にとりてなづかしの心を惹き起し候。菅原君の「歡樂」も面白く「默然」とに至つては特に小生にある追憶を強め候われにはこそ更のしく感せらるる所候(三十六峯生)

夏の海

平野萬里選

河野翠 激

夏の雨南の海の瑠璃盤を馳せぬ巨人の一万騎
かな

もらゝの短艇にのりて大海を君と流れぬ夏の夜霧に

投錨す賊船五艘夏の月椰子より高き無人の島に

はとぎす聞きぬ真闇の大海に下りし天のすくひの聲と

夏の海いとれごそかにたそがれぬ尊きものをつつめるごとく

○ 三明 千鳥

霽はれて藻の花かをる初夏の大海を吹く朝の風かな

○ 西岡 萩 雨

藍とさしばかりにはれぬ夏の海白鳥はしる南の方へ

河野素陽

龍の宮すは大事あり遠巻けと大雷雨する八月の海

君とわれいくたび聞きぬほととぎす海の方より風ふく夕

○ 増野 翹 白

夕づく日はつ夏の海揺曳す君が手による利那のころ

さくら貝蝶貝となり濃き藍の海にし君と二人住まばや

夕汐や追分ほこる海人の子を待つらし磯に女が焚く蘆火

○ 筆政 内閣 (中外日報)

- 樞密院…時事新報
- 文部省…讀賣新聞
- 遞信省…日本新聞
- 農商務省…中外商業新報
- 海軍省…都新聞
- 警視廳…やまと新聞
- 大藏省…東京朝日新聞
- 外務省…シヤパンタイムス
- 司法省…萬朝報
- 陸軍省…東京日々新聞
- 東京府…中央新聞

名勝誌を讀む

翠 激 生

△由來出雲は風光の明媚を以て鳴る、小セチ、湖又は日本のスヰツルと稱せらるゝも亦固より其所ある也。余不幸にして未だ親しく斯の倫を絶する勝地に入らず、詩神のよざしに背き詞友の懇誘を斥けたること一再ならず雖も、毎に袖往くもの無くんばあらず。

△頃者奥原碧雲君島根縣名勝誌の一冊子を編みて、幾多世の渴望せる讀書子紀行家の前に齎す所あり。四六版装釘頗ふる美、編と前後に分ち、二州一島の地勢沿革より交通勝地旅館に至るまで説述頗ふる丁寧を極む、殊に風景を述べ史蹟を傳ふるに流麗典雅の筆を以てして趣味深く雅致豊かに叙し了りたるか如きは、夫の所謂杜撰なる案内記と全然趣を異にするものなくんばあらず、別して松江湖畔の景勝を記せる段章は直に一篇の散文詩となせりといふも不可なし。觀光の客、乞ふ先づ此書一本を携へて游べ、興趣一段の深さを加へん。

△附録松江街圖亦極めて鮮明なり、而かも巻頭三十

面の寫眞版は旅行家が垂涎措かざるどころなるべし。△漸やく頁を繰りて外篇「雲山碧水」に到れば、紀行文七篇によりて、著者碧雲が美はしき文技に接するを得む。

△唯夫の文中こちたき漢詩和歌を挿入し、或ひは商舖の廣告か挿み載せたるが如きは、余の嗜好より、極めて感興を害したるものなることを、著者と出版者とに併せて告げんと欲するのみ。

虫

(募集句)

第四回發表

風 選 五 藍 香 雨

階級ぐや灯に近く虫の鳴く
 蝸垂る、草戸の闇や虫の聲
 虫鳴くや提灯消えて草の闇
 蟲鳴くや行燈暗き田の庵

▲懸賞俳句募集
 (第六回課題) 切十一月三十日

- △△ 蛸 椰 祝 羽 風 氏 選
- △△ 枯 草 祝 羽 風 氏 選
- △△ 蕨 香(雪香) 奈 倉 梧 月 氏 選
- 各題十句。用紙半紙。本社編輯局宛。

銀鈴社詩稿

増野 翅白

雛菊の花こそ咲けれ筒井づゝ振が髪の君おもふかな

秋の朝浄土のこちわだつみは法音たてぬ寂光のして

後藤 孤星

信濃路をまひるいそぎぬ商人と猿曳く人のざれ言を聴き

まごへるやわづらひぬるや口籠の面たれてあり秋の野の花

雨の日の雲にほの見る紺青の空か君見ぬ人ごみにして

悄然と秋の日くれぬ大空は野に迷ふ子の面にも似て

「時ぞ來ぬ汝等甲へ」と森林の杉に今宣る木枯のかせ

松本 掬雨

秋の風野に吹く音を八乙女の摺裳曳くやと思

ひけるか木

小川 童月

夕月夜沙魚とる子が苦用に酒宴すらしたみごゝるのして

森脇 桃村

いと妙に樂鳴り千花かほるかな尺をへだてず君と語れば

紅鬘ぐ嬢が家の屋上に天色雲し冬の日暮れぬ君見ねば淋びしき心地憔悴の翁冥途をたどる

とやうに悪性の魔が雄たけびか刻々にこころ怖ぢしむこがらしの風

社 告

◎本誌毎巻登載の募集句及び雑吟句は梧月羽風両氏更
 に之を選みて春碧雲會より出版の一大句集に掲載せ
 らるべき旨につき奮て投吟ありたし。

◎本誌讀者懸賞募集の舉は一先づ之を中止す、前金拂
 込の諸君にして違約のため返金方請求せらるゝ向は直
 に申出られたし速に御精算致すべし。

春圃雜筆

其の五

芭蕉と其角の句鏡

聲かてて猿の齒白し峯の月、これは、其角の句で、深山の夜に猿がないて居る、而も其聲はなきくゝて瀟瀟してしまつて居る、と見ると、猿の齒は月に映じて眞白く、實に凄い景をよんだのである、是は、支那の楊子江の中で、巴峽といふ急流がある、此處で、暮夜猿がなく、其聲が人の腸を斷つといふことから出て來た句なのである。詩などに、巴峽秋深五夜哀猿叫月などある。俳諧古選の評に、渾雄惜哉不令此老從事於詩とある。此句を芭蕉は非常に稱賛して、それと同じ様な句を作らうといつて作つたのが、鹽魚のはぐきも白し魚の棚と詠んだ、其處で、其角が、聲かてての句と鹽魚の句とを競べて見ると、何うしても芭蕉の方がいと其角も感服した。一寸見ると鹽魚の鰓はすさまじいかう年の暮とか、老の果とかいふ様な句が、つきさうであるのに、魚の棚とやつてのけた處はさすが芭蕉の芭蕉たる處だと感心したさうです。何事も、鬢髪を入れざる差に於ても猶偉大なる功を現はすのである。

地方俳會及俳人の評

蘆 花 生

- うばら會は山子的俳會なり。
 - 春雨會は田舎の餓鬼大將にして月並派の集合團。
 - 伯水會は樹下の幼兒なり行末は俳界一番の概あり
 - 水仙會は一度三寸草鞋に五尺杖で、俳界町を見物して戻るべし。
 - 不知奈會は田舎ホット出の娘的。
 - 八重櫻君は三允碧梧桐の門で素人には一寸解し難い句がある
 - 梧桐君は虚子別天樓派で、句法がきまつて居る、すなをな句。
 - 羽風君は格堂瓢亭の下馬なり、昔で云へば一茶派、句法瓢逸。
 - 静處君は青嵐紅綠派の、立板に水的口調で素人向き
- 社告 前回報告後本社維持費中へ寄贈せられたる諸君は金拾錢山本明星君金參拾錢藤本晚花君金貳拾錢某君金貳拾錢服部幸一君金拾五錢齋木正隆君の五氏なり掲げて感謝の誠を表す

其角と能因と

向島の之園で雨乞をした時に、時未だ至らざるものか雨伯不興なりしか、何うしても雨が降らない、其處で其角は小野の小町を氣取つてか、例に依て例の如く、自分の句のユライ處を示してやらうといふので、夕立や田を三めぐりの神ならばとやつた、處が其角の運の強いのか、翌日になつて降るはくゝ、所謂大雨盆を覆へすが如しとでもいひさうなれば雨なので其角の鼻の高さ一丈有餘となつたらう。だから自分の集の序に翌日雨降ると書いてあるのを見てわかる。

之と同じ様に、例の能因法師が「伊豫守實綱に伴ひて彼國に下りたりけるに、夏の始日久しく照りて民のなげき淺さかゞざるに、神は和歌にめでさて給ふものなり、試によみて三島に奉るべき由を國司とせきりにすめければ、あまの川苗代水にせき下せ天下ります神ならば神、とよめるを御幣に書きて神官して申し上げたりければ、炎旱の天俄にくもわたりて大なる雨ふりて枯れたる稻葉ねじなべて、縁にかへりにけり云々」とある。好一對の話、其角と能因との性格に思ひ及ぼすときはすゝろに微笑の禁せられぬのである。

銀鈴社詩稿

木村 秋 浦

また思ふ我が世も人の世もかくは泣かるる宵
ぞ灯をたまへ君
此ふたごせ憂愁ひしひし小やみなう我にせま
りぬ怪形の相よ
あけぼのや瑞雲のぼり七彩の虹をつくりぬ君
れもふ時

脇 森 桃 村

癪を病むしら髪はけたる老人のよろめき思ふ
街の夜の笛
乞食らが群する寺の大門に銀杏散るなり黄ば
む秋の日
風や病み衰へし白髪のお翁いまはの呻吟のや
うに

松 田 松 葉

朝の月晝も蟲なく君が家の城壁めける木立を
思ふ
山の寺水をいでたるかたちして芙蓉はさきぬ

文藝雜俎

ありあけの月
ぬなか家は庭につづける畑なかに薬物ほせり
秋のかせふく

山本潜龍

夜もすがら聞えぬ果ては世に一の愛びとをし
もうかみぬるかな
何の魔ぞ虎毛の駒に鞭うちて襲ふと見たる木
枯ゆかせ

河野翠激

君戀ふる夜ごろいくたび残忍のすがたを胸に
思ひうかべし
ああされば野往く枯瘦の影と見よあやしきま
でに忘れ得がたし
なにゆゑにとがめたまふや人ふたりひとしき
やうにうつくしむ身を
秋のかせわが淺ましき輕薄のこころむちうち
遠鳴りゆくよ
このこころむちうちたまふ先人にとすればそ
むき走りけるかな

○わか舟第五卷四、爾人の秋燈夜話に云へり、今の所謂大家といふもの、多くは新短詩或は新短歌に對して、其實質を吟味せず、其作者に同情せず先天的に一種の反感を以て之を待つの如し。中央公論所載の意見なるもの明かに其一端を示せり。と、吾人また意見を同す。同短詩の佳作を擧ぐれば

我天地は (羽田叢雲)

たぐら踏む火炎は若き執着の呼吸のいろして鐵路 (龜谷彌生)

かしけり (波邊淡舟)

白楊の木立めぐりて夕ぐれを黍歌吹きぬは秋の (信田白露)

初風の風は嵐よりわかやかに青蘆ふきぬれもだか (白黒夕雨)

の池 (白黒夕雨)

遠く立しら斑の牛の乳を搾る朝の乙女は露して見 (白黒夕雨)

○深の花第七卷八、雉子郎の紅緑と繞石あり、斯の如きは何人も先づ興味を以て見む。

○新潮拾月の巻、前田翠溪の葡萄の杯李東子の神戸俳諧史溪舟のつも卓あり。時文欄の高潮は青年の活氣見えて嬉しく鼎中沸々は随ひ思ひ切り皮肉に言つた處もあり「華族にして文學博士たる加藤の大先生」に向つて「我輩一ツ建議するが、隱居仕事に朝鮮あたりへ渡つて、尤も煩悶せざる朝鮮の子弟を教養することは何うたうか。」と毒づけるが如き一例なり

○山鳩第三の第十一、吾人は短歌新林詩に於て一層嚴嚴なる選抜を加へむことを薦む、鳩吹豆鉄和裏面文學等は依然一種の趣味を帯べるに似たり。

○潮光第八、一條の柳雨の人物の養成論旨必らずしも不可なるに非らずと雖も、曰く司馬温公曰く中庸曰く朱子曰く諸葛孔明等の所謂金言を開かされるの煩はしきに勝へず、中學世界にでもありさう也。

○ふた葉第一第二、木村小舟氏を総裁に戴くと觸れ出せり。小舟氏曰く「予が本誌に關係する所は、之迄地方雜誌の多くに、單に其名を列ねしに過ぎざりしものと大に其趣を異にするものあり。」と難有い哉。吾人濫りに小舟先生を累はする者にあらず、唯今少しく大人げならんことを望むのみ。

○若葉第二の第十、明星記者を誠しむと云へる一文あり、た説は尤もなれど、薰園氏の如きは、普通の態度を以てしては到底覺醒せしむる能はず「輕佻な文字を正に用ゐるべき場合に用ゐる」荒療治を施すの止を得ざるに出でたることを思はざるべからず、明星記者は決して閑歴黨派等の上に立ちて言議せるにあらざるべし、若葉記者幸ひに安せよ。

○若葉第三第四、紙質印刷憎きまで美しくしければ、内容甚だ呆氣無し。石井柏亭氏の應募画短評他の雜誌に見ぬ特色ならむ。殿眼今ひと息。

○文華第壹、發刊の辞なるものは必らず初刊の紙上に出版ねばならぬものや、「革命の急先鋒」などは聞かぬも厭な字なり、寧ろあつさり遣つた方が何ばう嬉しかりしなぐんものを。さは云へ龍鳳氏の熱心は何ものにも増して未頼母し。漢詩壇は除けて欲し、二十世紀にはコンなのを本氣で讀む隙つぶしもあるまじ。

○あかつき七ノ五、七ノ六、クセラ三ノ十二、金箭一、シヅキ二ノ二、五月三ノ一、行餘會誌四、五、清香四二、キカラギ八、若櫻二ノ九、三ノ十、大源三ノ六三、ノ八、無限思潮二ノ十三、三ノ十一、幾久兄新誌五十二、明ボノ五(以上、十月三十日迄着社) 翠激生

つゆぐさ

滿木は凋落すなり百舌鳥の鳴く
 朝寒や舟の烟の草に這ふ
 西行は牛に乗りたり秋の風
 藪々木枯鳴るく藥師堂
 草の戸に茸吊り干す日和哉
 篠編む大川堤や花すすき
 針磨ぐや裏田の闇の落水
 枝川に鮒釣る人や落し水
 水村の灯寒し落し水
 灯せば萩白けたる雨夜かな
 鳴たちて野澤の蘆や黄昏る
 庵に通ふ小道や萩を括りけり
 ひようと放つ矢風に散るや萩の花
 能く案山子憎まれ者の田を守る
 山寺の輪燈暗き星月夜
 秋風や古き土藏の鼠穴
 秋江を斜に度る白き鳥
 石垣に糸瓜の蔓や俳諧寺

珠露(美濃)
 五香(岡山)
 松葉(出雲)
 潜龍庵(美濃)
 峰秋(出雲)
 五香(岡山)
 神の子(石見)
 梅窓(岡山)

銀鈴新春號豫告

我銀鈴は近く迎へんとする丁未の新春に於て更に一段の刷新を加へんため、普く新作家の投稿を募り、己に企畫し且つ將に着手せむとす。諸般の改善は新春の紙上に燦然として諸君を驚かすむ、我が親愛なる社友に及び讀者諸君、乞ふ金玉の作を寄するに吝なること勿れ、
 一 次號十二月の巻は是を休刊し一月號は元旦を以て發行すべし
 一 投稿の種類は小説可なり美文評論詩歌俳句隨筆亦固より可なり其政治時事に涉らざる限り敢て種類篇數の奈何を問はず充分の敬意を以て之を迎ふ
 一 締切は嚴に十二月十日と定むるも成るべく早く投せらるゝを可とす
 一 小説美文評論隨筆等散文的作物は凡べて半紙半面十行二十四字詰の割に清記の事
 明治三十九年十一月二十七日 銀鈴社

伯水會 (能義井尻) 峰秋報

○唐辛五句集 八重櫻氏特選
 早稻の穂の出る頃青き唐辛 幽水
 茄子畑に白き花咲く唐辛 五香
 藪焚いて灰に埋れし唐辛 五香
 瓦積で庭の崩れや唐辛 石水
 裏畑や茄子立枯れて唐辛 鷓友
 間引菜の上や三ツ四ツ唐辛 峰秋
 熟爛に舌のしびれや唐辛 峰秋
 追吟
 畑脇や壘に隣りて唐辛 峯秋
 ○日傘五句集 梧月氏特選
 門に出て日傘の人と話し覺 鉄舟
 日傘ふれて柘榴の花のこぼれ覺 梅窓
 剪り花にさしかけてある日傘哉 杉雨
 茶屋女繪日傘さいて通りけり 杉雨
 後船の繪日傘一つ目立つなり 露女
 玉垣を廻る日傘の女連れ 露女
 大佛や日傘々々の仰ぎ見る 露女

陽炎會 (岡山) 富田五香報

陽炎會五句集祝賀のため再び本月十五日操山麓の旗亭舞鶴館に臨時會を開く會する士貳拾八名小宴果て、運座互選を營む月柿百舌鳥各一題五句を課し終りて句合互評及競吟福引等の餘興あり歡を盡して散せしは月正に操山の端に懸り一群の雁月を掠めて鳴き過ぐる午後八時半なりき
 五香三十二点、芦仙二十五点、旭水史黑潮二十点、梅窓十八点、柳盡星宇花人十六点、楓葉十五点、蛙佛十斗九字各十四点、二牛浮草十三点(以下略)
 十点 百舌鳴くや垣に髮結ふ湯治人 五香
 九点 朝戸出の露の深きに百舌の聲 三竿
 七点 日の當る二階障子や百舌の聲 五香
 柿盗人十戸の村を騒しぬ
 須磨暮れて明石に月の浪枕 二牛

梧葉晴雨の卷 (其二)

富田五香作

○梧月○羽風○靜處△鐵笛▲水人評

△惟然去つて鬼貫淋し松の内

○場合不明

●梧子の評と同感

△惟然と鬼貫の殊別なる關係は問ふの要なむ何となく面白し

唐草の蒲團床しや歌がりた

○座蒲團とは見えす

▲座蒲團にした處でたゞ漫然配合し得たりといふべきのみ

●水子の尻馬に乗る

△坐蒲團なればれかし宜しく「座蒲團ゆかし」と改むべし

○元日の讀物多き炬燵かな

△○感服いたした

●集中の白眉併し想は餘り新しくはなし

初鶉やかかりと寒き川手水

▲からりとは上乘の形容にあらざるべし

○陽炎會五句集互撰會
一寺(秋結)十一月三十日切岡本癖三醉赤木格堂兩君
特選一寒聲十二月三十日切塚本虛明内藤鳴雪君特選
一新年雜詠一月三十日切森田雷死久武定巨口君特選
一春風二月二十八日切峰青嵐高濱虛子君特選用紙隨
意幹事岡山市磨屋町四〇富田武次郎(五香)

○陽炎會五句集互撰會
○富田武次郎(五香)

○富田武次郎(五香)

(桃村)

○待は待?残りといへばすみたるなるべしさを
を待みとは

●梧子の評もあれど残りとは最終のくじといふ
意に見て差支なし併し類句あり

▲似よりたる句あるやう覺ゆ

初鶉數ざはりと星明り

▲賛成し難し

●「やはく」とは厭ふ形容なり
松の内歌語りする炬燵かな

▲讀み物多きといふ句にたどりたり

△然り

寒聲や宵小淋しき士族町

▲普通のもの△二世紀前

校僕に古き双六貫ひけり

○上五動かん▲賛△どころの話ぢやない

▲行き抜ける笹の小路や寒の雨
■藪なれば兎に角抜けるといふ字當を得たるや
否や疑はしけれ也●笹の小路といふこと分ら
ず

△○冬の雨終の花に雀鳴く

▲一通り出来た句なり類句あるやうにも思ふが
先以て取る

福引の赤禪や竹の先

●俗に出て俗に終る

▲スリコギとそこらに見え候重き句にあらず

歌がるか更け行く室の灯哉

▲動かむ

△歌かるか女ばかりの夜は更けぬ子規

元日や草庵閑に茶のたざり

○類句あり

○先生の教訓の詩や筆 始

▲小生は好まず

△生硬

●稚

初鶉鳴くや田中の杉二本

○陳

▲同感

●僕も同感ほととぎすにもこんな句がある
書初や毛せんしく青疊

○脱字あるべし

▲敷いて?稚氣

△福引の待み心や残り

● 廣 告 ●

○新年號廣告募集

「銀鈴」明年一月發行第拾八號は平素より數百部を増刷して廣く配附するが故に廣告の功亦顯著ならん十二月十日までに既定の料金を添えて申込まれし行數により幾分割引すべし。社友の年賀廣告は特に四行以内拾錢にて需めに應すべく是又精々申込を乞ふ(同號に限り交換廣告を謝絶す)

銀 鈴 社

美術

若 菜 籠

月刊 雜誌

- 機關誌若菜籠は文學美術の両面に涉り内容豊富にしてコマ繪を掲載す
- 十一月號に新年號大懸賞募集公告を發表す
- 第四號既刊目下入會好時期申込次第規程送附す
- 會費一ヶ月金拾錢
- 見本郵券拾錢を要す
- 大阪市北區木幡町三三六

若 菜 會

窪田空穂先生監督

紫陽花

毎月一回 一日發行
 一部金五錢
 半年分貳拾八錢

來れ!!! 清新なる趣味を味はむとする者は來れ!!!
 本誌は短歌専門の雜誌にして且又新詩散文をも大に歡迎すいづれも自然主義をこる眞の聲なり

發行所 東京市京橋區南傳馬町三丁目廿一 紫 絃 會

銀 鈴 定 價 表		廣 告 料	
一部金五錢	金五厘	一行五號活字二十四	字詰貳拾錢半頁貳圓
六部金參拾錢	郵券代用壹割増	
十二部金五拾五錢		

明治三十九年十一月二十五日印刷
 年十一月二十七日發行

銀鈴第拾七號

發行所 島根縣邑智郡田所村 銀 鈴 社

- 島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
- 編輯兼發行人 河 野 岩 雄
- 全縣全 郡川本村大字川 木五三八
- 印 刷 人 原 八 太 郎
- 全縣全 郡全 村大字 全 五三八
- 印 刷 所 邑 智 活 版 所